

# ◆ 実 践 報 告

## 「動機づけ」の効果的な教授法に関する一考察

：中学・高等学校教師を目指す学生のレポート分析を通して

### A Report on Teaching Practice of “Educational Psychology”: Practical Use of Students’ Experiences of Motivation

田中 浩司\*

#### 問題と目的

本学で教職科目として開講される「教育心理学」は、教職員免許法施行規則第六条第三欄「教育の基礎理論に関する科目」のうち、「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）に相当する。

特に本授業は、1, 2 年生の受講者が比較的多いため、教職の技術に直結する知見を提供するというよりも、初等教育段階から中等教育段階までの自らの教育経験を相対化しながら学術的議論と結びつけていくことに比重を置いて授業をデザインしている。

そのため、講義内容としては人間発達の基礎理論や学習過程についての、いわゆる古典理論を中心とした、従来の教育心理学の知見紹介しながら、グループワークや小レポートを通して、自分自身の学習経験を意識化し、理論化させることを意識して授業を進めている。

その中でも学生の関心が高い単位として、「動機づけ」領域がある。今日の学生にとって動機づけは極めて身近な用語となっており、「モチベーションの高低」といった表現が、かなり多様な文脈で用いられる。

そもそも動機づけを理論づけることは容易な作業ではなく、興味や性格特性といった安定的な要因に規定される一方、状況にも依存する不安定な現象であり、個人内要因が相互に影響し合う現象であると共に、場やコミュニケーションといった状況要因にも規定されることは従来からも指摘されている（鹿毛, 2004）。

こうした中で、学生が日常的に用いる「モチベーション」を、未定義な表現として一蹴することは容易であるが、こうした学生の動機づけイメージを明らかにし、そこに教育心理学的な観点から新たな意味づけをすることが出来れば、学習効果をより高めることが出来ると考える。

そこで本研究では、学生はどのようなものとして動機づけをイメージしているのか、自らの教育経験を振り返ったレポートの記述内容を分析することで、その構造的特徴を明らかにすることを目的とする。

\*都市教養学部 人文・社会系  
人文科学研究科

方法

調査期間：

201X年8月

調査対象者：

教育心理学を受講した学部1年生から4年生。(1年生24名, 2年生29名, 3年生15名, 4年生9名)

データ収集方法：

「教育心理学」の授業において、「自らの中学・高校生活をふり返り、動機づけが高まった、あるいは低下したと感じる経験を書いてください」という小レポートの内容の分析を行った。

倫理的配慮：

本研究の主旨と、個人情報 that 特定されないよう、論文上にはデータ収集を行った授業の開講年度は記載しないこと、具体的エピソードについては、学年ごとの表記は行わないことを伝え、口頭での了承を得た。

また、エピソードは個人情報を保護することを目的としてて大意がかわらない範囲で変更している。

## 結果と考察

収集したデータについて、記述された事例が生じた場所（以下、「テーマとなる場所」）、具体的事例に影響を与えている他者（以下、「重要な他者」という二つの観点から分析を行った。

分析の結果、テーマとなる場所については、学習塾（塾）及び学外のスポーツ関連団体での経験（スポーツ）といった学校外活動、高校・大学受験に向けての学習経験（受験勉強）、定期試験に向けての学習経験（試験勉強）、その他の学習全般に関わる経験（その他学習）といった学校内学習活動、及び体育祭に向けての取り組み経験（体育祭）、部活動経験（部活動）といった学校内特別活動が抽出された。

また、重要な他者については、明確な記述がなかったものは自己対話として分類した。明確に言及されていたものとしては、教師、親、教師や親以外の大人、きょうだい、友人、

Table1 言及されたエピソード数

	学校外活動		学校内活動					計
	塾	スポーツ	受験勉強	試験勉強	その他学習	体育祭	部活動	
自分自身		1	3	2	2		8	16
教師			9	1	8	1	15	34
親	1	1	6	2	5			15
教師や親以外の大人	2	1			2		2	7
きょうだい				1				1
友人				3	3		4	10
先輩	1		2				3	6
仲間					2		3	5
計	4	3	20	9	22	1	35	94

注) エピソードを複数言及した学生もいたため、合計エピソード数は総事例を超えている。

先輩，不特定の仲間に分類された。

言及されたエピソード数をクロス表にしたものが Table 1 である。

テーマとなる場所について，もっとも多く言及されたのが部活動（35 エピソード）であった。次いでその他学習（22 エピソード），さらに受験勉強（20 エピソード），試験勉強（9 エピソード）がつづく。また，重要な他者としてもっとも多く語られていたのは教師（34 エピソード），ついで自己（16 エピソード），親（14 エピソード）が続く。

ここからはもっとも多く見られた部活動のエピソードについてエピソードをもとに分析する。

#### 1. 部活動に関わるエピソードの分析

部活動に言及されたものの中でも，もっとも多く見られたのが教師との関わりである（35 エピソード中，15 エピソード）。

部活動での教師との関わりについて言及されたエピソードは，教師との関わりを肯定的に捉えるものと，否定的に捉えるものと対極的であった。

##### （エピソード1：部活動－支持）

記録が伸び悩み，退部しようかと考えていたときに，顧問から「あなたはチームメイトのことをよく見ている」と肯定的な評価を受けた。

上記は，生徒に対する温かい眼差しが部活動の継続を促した，支持的な関わりが述べられていた。一方，生徒の反発心を煽るような言葉がけ（反発誘導的）について言及するものが見られる。

##### （エピソード2：部活動－反発誘導）

教師があえて小さなミスを指摘していた。これは結果的に，生徒の反骨精神を煽ることで，生徒も頑張っていた。

教師による反発誘導的関わりは，筆者が行った保育・幼児教育現場での遊びの指導実践の中で見られている（田中，2010）。

学生にとって，こうした教師が生徒と対立的な関係を形成することで，生徒のやる気を高めるような関わりは繰り返し経験している。

また，部活動の中では教師とは異なるが，年上の先輩との対立的な関係の中で動機づけられた経験が記述されている。

##### （エピソード3：部活動－反発誘導）

音楽系の部活動で，先輩から「音が汚い」といった言葉をかけられた。その時はショックを受けたが，逆に力が漲った。

こうした言葉は、上記の教師のように計画されたものではなく、生徒自身が意味づけ直すことによって、「力が漲った」という正の効果を生み出している。こうした、同じ出来事であっても、受け手側の認知が代わることによって、正負両方の効果を持ちうることを伝える上で、重要なエピソードと言える。

また、部活動に関連し次に多かったのが、自分自身の中で動機づけを高めたエピソードである。

(エピソード4：部活動－自己目的)

音楽系の部活動に入ったことで、これまで触れたことのない楽器を前にワクワクし、上達した。

上記は、中学、高校の吹奏楽部でのエピソードである。音楽に関する習いごと経験のある生徒であっても、吹奏楽の楽器には触れたことのないものも少なくない。上記のエピソードは、そうした学生の音楽への向き合い方の変化が現れたものと思われる。

## 2. 学業に関わるエピソードの分析

はじめに、学業の中でもっとも多く語られた、その他学習（22 エピソード）について検討していく。その他学習の重要な他者としては、教師（8 エピソード）、親（5 エピソード）、友人（3 エピソード）が上げられている。

学業について、教師との関わりの中で語られたエピソードには、明らかにネガティブな思い出として語られているものが見られる。

(エピソード5：その他学習－非支持)

授業中、先生に分からない問題について質問をしたら、「みんなは分かるよね」と笑われた。

学業に対する動機づけが低下した経験として語られてはいるが、こうした教師の言葉が生徒に及ぼす影響を伝える上では効果的なエピソードと思われる。当然、こうした非支持的な関わりではなく、支持的な言葉がけを受けた経験も多く記述されている。

(エピソード6：その他学習－支持)

分からない問題があったら迷わずに先生に質問に来なさい、と言ってもらえた。

こうした教師から受けた言葉は、必ずしも褒めると行った言葉ではなく、生徒を支えるという言葉が動機づけに繋がっていることがわかる。

先述の部活動に関して、親との関わりが言及された例は見られなかったことから、学生

の中には学業に関して家族の眼差しを受けていることがわかる。

(エピソード7：その他学習－支持)

成績不振に陥ったとき、親が責めるようなことなくサポートしてくれた。

上記のエピソードは、学業全般について語られたものであるが、こうした親との関わりは受験勉強に関わるものが多く見られている。

(エピソード8：受験－支持)

受験の際に中々成果が出せず不安になったとき、母親が「皆違って皆良いんだよ。あなたにはあなたの良さがある」という言葉をかけてくれた。

こうした親からの言葉がけも学業に対する動機づけを規定する要因であるが、こうした親からの眼差しは否定的な影響を与えることもある。

(エピソード9：その他学習－非支持)

勉強が出来る姉と比較されることによって、余計にやる気をなくしてしまった。

直接的な言葉がけではなく、きょうだい間で比較されることによって、否定的な眼差しを感じている生徒が、学業への意欲を失う姿が記述されている。こうした問題は学校生活の中で可視化される可能性は低いものの、生徒自身の学習に対する向き合い方に大きな影響を与える場面である。

### 3. 学校外活動に関わるエピソードの分析

学生の中には学校外での学びについて記述しているものも見られた。特に、学校外の学習の場である塾では、親や教師とは異なる大人や先輩との交流の中で、多様な動機づけが生れている姿を見て取ることが出来る。

(エピソード10：塾－支持)

自分に期待をかけてくれている塾の先生に、成績が上がったことを伝えるのが楽しかった。

こうしたエピソードは、子ども達が学校という単一のコミュニティの中だけで生活しているわけではなく、塾や学校外のスポーツ活動のような多様なコミュニティを横断的に生き、多様な他者との関係の中で動機づけが形成されていることを示すものである。本調査では、中学、高校生活の中で動機づけが高まった、あるいは低下した経験を記述するように求めたため、学校内あるいは学校生活に関連した活動に焦点化した記述が多かったこと

が考えられる。一方で、思春期、青年期はこうした親や教師以外の大人（年長者）の影響を受けながら、自らのアイデンティティを形成していく時期でもある。学生にとって身近な場면을想起するという意味では、こうした多様な生活の場を記述できるような課題提示の工夫といえる。

## 総合考察

本研究は、大学生が中学・高校生生活をふり返り記述した動機づけについての記述分析を通して、教育心理学の受講生の動機づけについてのイメージと、そうした場면을想起しやすい教育心理学の授業方法を検討する事を目的とした。

記述内容の分析から、学生がもっとも多く言及したのが部活動であった。部活動は教師と生徒、先輩と後輩、同級生同士の関係といった多様な人間関係の中で展開する活動である。こうした関係は、エピソード 1 にみられた「支持」型のように、生徒のやる気を引き出すだけでなく、エピソード 3 のように否定的に見える関わりが、結果的に生徒のやる気を引き出す「反発誘導」型も多く言及された。

本研究では、学生に自由に場면을想起してもらう形でエピソードを抽出したが、今後はこうした支持、非支持、反発誘導といった枠組みを与えた上で、場面の想起を促し、その上で理論的な知見を提示していく授業方法が考えられる。

一方で、学校現場には、個人的な動機づけだけではなく、集団的な動機づけを高める、あるいは低下させるような場面も多く見られる。こうした動機づけの集団的特徴については、今回の調査ではほとんど言及されていない。今後は、教育実践事例を含めながら、動機づけの多様な側面への気づきを促す授業方法を検討していく必要がある。

## 参考文献

- 鹿毛雅治（2004）．「動機づけ研究」へのいざない 上淵 寿（編）動機づけ研究の最前線 第1章 北大路書房．
- 田中浩司（2013）．集団遊びの発達心理学 北大路書房．

## 謝辞

本研究に協力して下さった受講生の皆さんに感謝いたします。